

ふりがな 氏名	たがの あつひさ	都道府県	宮城県	
	多賀野 惇久			
所属/肩書	宮城教育大学教育学部在学			
私の ESD活動	米食・稲作文化を題材とした、タイ・アユタヤ県、 トラン県と宮城県大崎の小学校のインターネット ト交流			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

私たち宮城教育大学の学生 10 名は異文化理解と多文化共生の観点から、タイ・アユタヤ県、トラン県の小学生、高校生と宮城県大崎市立大貫小学校、同市立沼部小学校の児童らをインターネットビデオ会議システムによって相互に交流させるプロジェクトを企画・実行しました。

タイと日本はどちらも米食・稲作文化を持つという点で共通しています。大貫および沼部小学校は以前よりユネスコスクールとしての活動を実施しており、児童らはタイについての簡単な知識を持っていました。私たちは 2013 年 6 月に両校で事前学習を行い、タイの米食・稲作文化についてさらに興味を持てるよう、タイ米とタイの代表的料理(トム・ヤム・クン)を調理して児童らに食べてもらいました。

翌月には学生プロジェクトチームがタイに渡航。同様にアユタヤ県の私立ジラサート学園で日本米を調理して児童らに食べてもらったのち、同校と大貫・沼部小学校とをインターネットビデオ会議システムで結んで交流を開始しました。児童らは互いの食文化を体験した感想を話しあったり、互いの地域の稲作・気候・日常生活などについて紹介しあったり豊作を祈る踊りを体験したりすることで、互いの文化を理解し、尊重する態度を身に付けることができました。

なお、本活動の運営は「顔が見える交流」を目標に行いました。単にビデオ会議システムで双方を結ぶだけではなく、事前学習という形で学生プロジェクトチームと日本の小学生が前もって顔をあわせておくことで、児童らが交流時にタイを、実感を持った交流先として認識できるように配慮しました。

本活動で子どもたちが初めて見る日本のお米や踊りなどに目を輝かせて“great!” “interesting!”などと言ってくれた様子がとても印象的でした。双方の児童生徒の互いの国や文化についての興味・関心を引き出すことができたのだと思います。本活動を通して異文化理解と多文化共生の観点から多少なりとも ESD に貢献できていれば幸いです。

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

ESD 発展のために若い世代に求められることは 2 つあると考えます。

1 つ目は実現可能なレベルでの取り組みを着実に、継続して行っていくことです。「ライスプロジェクト」のような取り組みは地味でも確実に ESD の一側面を担うことができます。

2 つ目は周囲の人間を活動に巻き込んでいくことです。日本/世界では様々な取り組みがなされていますが ESD が一般に広く認知されているとはまだまだ言えない状況です。持続可能な社会の実現は未来に向かって、つまり私たちの世代が生きる時代に向かって求められています。若者がグローバルなレベルでの活動を展開することは様々な側面から困難がありますが、そのなかでも「これからの世代を担う私たちは持続可能な社会の実現・ESD について真剣に考えているのだ」ということを上の世代にアピールすることはできます。

地味でも、しっかりと問題に向き合い、活動を展開してゆくことが求められているのだと考えます。